

Title	創業初期の財務戦略がベンチャー企業の企業価値に与える影響
Sub Title	
Author	吉田, 継人(Yoshida, Tsuguto) 岡田, 正大
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2005
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2005年度経営学 第2098号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002005-2098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	岡田研究会	学籍番号	80431015	氏名	吉田継人
(論文題名)					
創業初期の財務戦略がベンチャー企業の企業価値に与える影響					
【問題提起】					
<p>創業初期のベンチャー企業は、資産も信用力もなく、また外部投資家との情報の非対称性が存在するため、外部から資金を調達するにあたって困難を伴う。創業初期に外部から投資を受けることは稀であり、一般的には自力金融 (Bootstrap Finance) によって資金を創出せざるを得ない。日本でも成長期には VC から資金を獲得した企業は多い。彼らは創業初期にどのような財務戦略を採り、外部資金を獲得したのだろうか。このような問題意識を基に、創業初期の財務戦略が企業価値を上げ、成長期の資金獲得に影響を与えるのかを明らかにすることが本研究の目的である。</p>					
【仮説】					
<p>以上のことから、仮説を、「ベンチャー企業は、自力金融手段の活用度が高まれば、外部投資家との情報の非対称性が低減し、1st ラウンドでの企業価値を高めることができる」とした。</p>					
【結論】					
<p>アンケートとインタビューによる検証の結果、自力金融手段の活用度が高いベンチャー企業が必ずしも 1st ラウンドの株価が高いわけではなく、仮説 1、2、3 は棄却された。仮説が棄却された要因として次の 4 点が考えられる。①自力金融手段の活用度自体が総じて低く、差が出なかった。②VC の投資姿勢が、成長可能性に投資しているために、自力金融のような安定経営に係わる項目は投資家を引き付ける要因にはならない。③自力金融力を組織として競争優位性を持つまでに高めるということは、そもそも短期間でできるものではなく、創業数年の企業では効果が現れにくい。④VC の運営するファンドの期間や特性にも影響を受けると考えられる。</p>					
【提言】					
<p>需要超過の状態にある 1st ラウンドの資金調達において、VC はベンチャー企業と比較して交渉力を持っている。VC の企業価値算定方法では、企業価値には将来のフリーキャッシュフローの方が大きな影響を与える。したがって 1st ラウンドで企業価値を高めるには、急成長市場にポジショニングすることと、市場が前期大衆に拡大するまで自力金融を駆使して資金調達を遅らせることが重要である。資金調達を遅らせることで、市場の不確実性が低下、情報の非対称性による過小評価を回避できるからである。</p>					